

題 バカコーン

所 日本の何処か 過疎地のニュータウンらしきところ

時 現代 夕食の時間

季節 秋

登場人物

山村 敏夫 45歳 自称会社員だが 実は遺伝子組み換えにかかわっている
山村 綾 39歳 敏夫の妻 家族で山奥に移り住んだが不満を持っている
山村 リリカ 7歳 敏夫の娘 結婚10年目にやっと出来た一人娘

榎 40歳 町内会の会長 実は遺伝子組み換えの会社員

あらすじ

山村敏夫は 妻と娘を連れて 山間部にある工場に勤務のため 過疎地のニュータウンに移り住んで1年になる。

綾は山奥の生活になじめず 不満を持っている。

世界は 遺伝子組み換えトウモロコシの突然変異 バカコーンが繁殖を繰り返しトウモロコシに覆われつつあった。

人々はバカコーン刈りに追われ、食卓はトウモロコシ料理が並ぶ

綾は 都会へ戻ろうというが 敏夫はなぜか応じない。

娘 リリカは領いたり 微笑んだりするが言葉を話さない。

榎は 町内会の決め事を伝えるに来るが 実は敏夫に本社の情報を伝えるに来ている。

このニュータウンは他社には秘密の実験地域であり 敏夫はここでバカコーンを駆除するための細菌の開発をしていたのだ。

とうとう敏夫の開発した細菌が本社に認められる。

綾は 榎にリリカを村の学校に入れてほしいと申し出でる。

しかし リリカは1年前 火災で亡くなり ロボットだった。

綾はショックでその時の記憶を失い、 敏夫は復讐のためこの実験地域に移り住んでいたのだ

敏夫はこの実験が終わったら家族3人でのんびり暮らしていこうと綾に約束する。

山村家のリビングダイニング

上手に玄関

下手に台所

中央にテーブル、敏夫、リリカが座っている

食卓には夕食の準備が出来ている

敏夫はテレビのニュースを見ている

リリカは漫画を見ている

綾が 台所から出来立ての料理を運んでくる

綾 皿を食卓に置き テレビにむかって

綾 もううんざり！

毎日 トウモロコシ、トウモロコシ、トウモロコシ！

いい加減にしてよ！

敏夫 (のんびりと) 1年になるか

綾 そうよ！ 1年もこうして我慢してきたのよ。

敏夫 (テレビを見ながら) バカコーンの威力は依然衰えずってところだなあ

すごいな、世界中バカコーンで埋め尽くされて 航空写真が真っ黄色らしい

綾 よくそうやってのんびりしてられるわね、うちの庭だってバカコーンで

いっぱいなのよ！

敏夫 生育速度が速くなって来てるって言ってるぞ

綾 いやだわ このままどうなっていくのかと思うとぞっとする

敏夫 全世界が同じ脅威にさらされているんだ うちだけじゃない

綾 だからって あなた平気なの？ 信じられない

敏夫 いや、悪いことだけじゃないと思ってさ、おかげで貧困地域の食料は確保されて

味も悪くない

適当に栄養もあるから みんな健康だ。

ほら 我が家だつてこのところ風邪ひとつひいていない。

綾 冗談じゃないわ 毎日トウモロコシばかり食べてるのよ

いい加減おかしくなるわよ

あなたのその楽観主義にはついていけません！

敏夫 まあ まあ 早く夕飯にしようよ

リリカもお腹すいたよな

リリカ (うなづく)

敏夫 ママのご飯は美味しいぞ！

お、今日は トウモロコシのシチューだ。

綾 リリカはこれ大好きだよな、たくさん食べないと大きくなれないぞ。
あなたはいいわよ、毎日工場へ出かけるんだから

ここで 一日中トウモロコシと格闘しているのは私なんですからね。

綾 リリカの手から漫画の本をとりあげ

綾 漫画はおしまいね

リリカは黙って従う

敏夫 いただきます

綾、リリカ 無言で食事を始める

敏夫 今度の日曜日もバカコーン刈りの当番になった

綾 また？

敏夫 しかたないよ この小さな町内会じゃ すぐに順番が回ってくるさ

綾 たまには家族でゆっくり過ごしたいと思ってたのに

敏夫 そうだな

綾 だいたいこんな山奥に来て スーパーもコンビニもなく

あるのはお化けとうもろこしばっかりで あなたは工場に入りびたりに

週末はバカコーン刈りで・・・

敏夫 この味付けはうまいな

綾 ごまかさないで！

敏夫 いや 本当によくうまいから正直に言ったまでだよ

綾 こっちへ来れば もっと穏やかで楽しい生活が出来ると思ってたのに

敏夫 そうだな

綾 どうしてこんな事になっちゃったの？

なんで世界中がお化けトウモロコシに占領されちゃったの？

敏夫 そうだなあ

綾 あなた！

敏夫 宇宙から種が飛んできたという噂もある

綾 私がそんな事信じると思ってるの？

敏夫 いや、世界の大方はこの説に納得している

綾 うそばかり

敏夫 人類への地球の怒りという人もいる

綾 それはほとんど宗教でしょ まじめに答えて
敏夫 いや、ごめん ごめん でもまんざら デマじゃない
綾 というと？
敏夫 政府は認めていないけど これは明らかに人災なんだ
綾 ジンサイ？
敏夫 遺伝子組み換えってわかるか？
綾 聞いたことあるけど
敏夫 品種改良の一種だと思ってる人が多いんだけど それは表向きの話で
実際はもっと深刻なんだ。
綾 どういうこと？
敏夫 除草剤も一緒に開発して その種だけが生き残れるようにして金儲けしている
悪名高き会社があつてさ
綾 うん
敏夫 無理な開発競争で 安全を確認しないまま市場に出したのがバカコンなんだ
綾 そんな・・・
敏夫 突然変異が起きたんだ おまけに除草剤が全く効かない
綾 それがこんなお化けとうもろこしになっちゃったの？
敏夫 そうして瞬く間に全世界に広がってしまった
綾 どうして早くそれを教えてくれなかったの？
敏夫 だって聞かなかったじゃないか
綾 そういふ問題？
敏夫 この生活を気に入ってるみたいだったし
綾 気に入ってる？ まさか！
敏夫 空気がきれいだわ〜とか 星がいっぱい見える〜って言ってたじゃないか
綾 あなた 私の何を見たの？この1年間。
敏夫 何をつて 綾とリリカは大切な家族だっていつも思ってるよ
綾 そうじゃなくて
敏夫 お！このトウモロコシのサラダもいいなあ、メキシカンタコスってやつか？
綾 これはいける
敏夫 いつもそうやって・・・
リリカ リリカ 食べてるか？ おいしいか？
リリカ (うなづく)

綾 絶望して立ち上がり窓辺へ行く
庭には 乱立するバカコンの種がはぜる音が響く

綾 あなた ここを出ましよう

敏夫 出てどうするんだ？ どこへ行ってもバカコーンだらけだぞ

綾 それでもいいわ

敏夫 ここにいれば 安定した仕事もマイホームもあるじゃないか

綾 でも もう耐えられないのよ！

敏夫 都会に帰ったらここでの暮らしのようにはいかないんだ

綾 わかってる

敏夫 何が気に入らないんだ？

綾 ここにいる人たち みんな変だわ

敏夫 みんなって？

綾 町内会の人たちよ。みんな薄気味わるい

敏夫 そんな事言うもんじゃやない

綾 でもそうなんですもの あなたは感じないの？

あの人たちみんなおかしいわよ こんな山奥で 黙々とトウモロコシと

格闘して絶対におかしいわよ

敏夫 今は世界中どこでも同じなんだ

綾 ニューヨークでもバリでも・・・うん インドでもアフリカでも・・・

それはそうだろうけど やっぱり変・・・

なんかゾンビの集団みたい

敏夫 おい！（それは言い過ぎだろう）

綾 再び窓の外に目をやる

綾 ……

間

敏夫 せっかくここで1年間頑張ってきたんじゃないか

綾 じゃあ せめてもう少しうちにいて

いまのままじゃ あなた工場に住んで時々帰って来るみたいだもの

敏夫 わかったよ

綾 ほんとに？

敏夫 今かかわってる仕事が一段落したら 休暇をとるよ

そうしたらずっとうちにいられる

綾 黙って食卓に戻る

三人食事をしている
玄関のチャイムの音

綾　こんな時間に
敏夫　見てくるよ

敏夫立ち上がり玄関へ行く
町内会長の槿、立っている

槿　いやあ　遅くに申し訳ありません
敏夫　かまいませんよ　どうぞお入りください
槿　じゃあ　ちよつとだけ

敏夫と槿　入って来る

槿　あ、お食事中でしたか　まずかったかなあ
奥さん　すみませんね　次の町内会の議事を相談しようと思いましてね
すぐに失礼しますから
敏夫　どうぞおかけください

敏夫　槿に椅子をすすめる
綾　不愛想に　槿の座る場所を用意する
槿　用意された椅子に腰かける

槿　やあ　リリカちゃん　こんばんは
リリカ　（だまって　こくりとする）
槿　おじさんとこのごはんよりずっとおいしそうだなあ
リリカ　（にっこりする）

綾　露骨に不機嫌そうにリビングから出ていく

槿　（小声で）奥さん大丈夫ですか？
敏夫　（苦笑して）少々手こずってますが　まあ、大丈夫でしょう
槿　うちも手ごわいですよ　でもおたくは　もつと大変だから
敏夫　なんとかやってます
槿　ところで　本社からの連絡なんです

槇 敏夫 はい

槇 敏夫 新しいプロジェクトを立ち上げるので 山村さんにそのチーフになって

ほしいということですよ。

槇 敏夫 新しいプロジェクト？

槇 敏夫 山村さんの開発したバカコーンを枯渇させる細菌の大量生産を開始しろとのことですよ。

槇 敏夫 アンチバカコーンの？

槇 敏夫 やりましたね、山村さん！

槇 敏夫 なんていい知らせなんだ！

槇 敏夫 これに成功してバカコーンを消滅させられたら わが社はモンスター社を出し抜くことになりますよ！

槇 敏夫 政府は必死にモンスター社を擁護しようとしてるけど そうはさせません

槇 敏夫 プラントを稼働していいんですね

槇 敏夫 そうですよ！

槇 敏夫 細菌の伝染力は強力です。 しかもバカコーンは密集しているから 数か月で世界中にその力が及ぶことも夢じゃない。

槇 敏夫 わが社は高い技術力を持ちながら 今までモンスター社の独占を許してきました。しかし、これで一躍業界トップですよ

槇 敏夫 いつか あいつらをギャフンと言わせたかったんだ。

槇 敏夫 (感動して) そうか・・・とうとう・・・

槇 敏夫 バカコーン刈りともおさらばです！

槇 敏夫 我々の努力が報われる日が来るんですね！

槇 敏夫 これからはかなり忙しくなりますが 総力をあげて取り組みましょう！

槇 敏夫 頑張ります

槇 敏夫 頑張りましょう

槇、敏夫 握手する

そこへ 綾がお茶を乗せたトレイを持って入って来る

不機嫌

綾 トウモロコシのお茶しかありませんけど

槇 敏夫 ありがとうございます でもお構いなく

綾 町内会でなにか？

槇 敏夫 バカコーン刈りのローテーションを見直すことになったよ

槇 敏夫 奥さんにはいつもご迷惑かけていますけど またひとつ宜しくおねがいします

綾 バカコーンの話には無関心にお茶を出しながら

綾 ちょうどよかったわ

会長さんをお願いなんですけど

榎 はい？

綾 うちのリリカを春から村の学校に通わせたいんです

敏夫 (びっくりして) おい

綾 こっちへ来てなんだかんだで もう1年も遅れてしまいましたけど

榎 はあ

敏夫 勝手に決めるなよ

綾 あなたはいつも忙しそうだし、大事な話のはりくりりして

敏夫 だからって いきなり

綾 リリカは こんな風にしゃべらなくなっちゃいましたけど 何でも

出来ます。字もずいぶん読めるようになったし、簡単な計算もできます。

榎 リリカちゃんが賢い子だってことは 承知してますよ

綾 ですから そろそろ学校に行かせてあげたいんです

ねえ リリカだって お友達と遊びたいわよね

リリカ (にっこり うなづく)

敏夫 綾 その話はまたゆっくりお願いすることにしよう・・・な？

榎 わかりましたよ 奥さん、校長に伝えておきましょう

綾 やつと機嫌を直してにっこりする

綾 よろしくお願いします。

リリカ よかったね！ 春になったら学校よ。

リリカ (うなづく)

榎 では私はこれで失礼します。

奥さん お食事中 すみませんでした。

榎 立ち上がり玄関へ向かう

敏夫 一緒に玄関にむかう

榎 じゃ、そういうことで。

敏夫 わかりました。

榎 おおむね 山村さんに一任ということになりそうですが

また連絡があると思います。

敏夫 ありがとうございます。

槇 その時がきましたね。

槇 ついに世界シェアですよ 山村さん！

敏夫 はい！

槇 あ、それにもう一つ、本社はこの成功報酬として 山村さんが願い出ていたこの実験地域での別件の研究に、資金提供を惜しまないとのことですよ。

敏夫 本当ですか？

槇 こんな待遇はまたありません。

敏夫 そうか・・・

槇 本社にもモンスター社に負けない大金が転がり込みますからね。

そりゃあ、山村さんは金の卵ですよ。

我々も ボーナス期待できそうだな！

じゃ！

槇 出ていく

敏夫 小さくガツポーズ

敏夫 やや興奮気味にリビングに戻る

綾は テーブルの上をかたずけている

綾 夕食 中途半端になっちゃったから片づけちゃったわよ

敏夫 (上の空で) ああ

綾 やっぱあの人も好きになれない

敏夫 うん？

綾 人の好きそうな顔して 何かたくらんでる感じがする

敏夫 そうか

綾 だいたい こんな時間に伝えに来る事でもないでしょ

敏夫 いや 一刻も早く伝えてほしかった、

綾 バカコーン刈りのローテーションを？

敏夫 バカコーン刈り？

綾 だからそれを言いに来たんでしょ？

敏夫 もうそんな事しなくてよくなるんだ

綾 あなた 何言ってるの？

敏夫 (低く笑う) ついにやった 俺はやったんだ

だんだん笑い声が大きくなる

敏夫 おれはやったんだ！

綾 どうしたの？

敏夫 やった！やった！

敏夫 戸惑う綾を揺さぶり はしやぎまわる

その時 リリカの座っている椅子にぶつかり

リリカが あっけなく 床に倒れる

綾 あ！

敏夫 我に返りリリカを抱き上げ椅子に座らせる

リリカは無表情

リリカの体は人形のように動かない

敏夫 悪かった

綾 リリカ 大丈夫？痛くなかった？

綾 リリカの体をさすったり髪の毛を整えたりする

リリカ (にっこりする)

綾 ああよかった どこも怪我してないみたいね

綾 リリカを抱きしめ

敏夫に

綾 学校に行く前に怪我でもしたらどうするの！

敏夫 すまない

綾 何事もなくてよかったわ

もう びっくりさせないで

綾 リリカを椅子に座りなおさせ

気を取り直して

綾 お茶入れるわね

リリカはミルクにしましょうね もう遅いから

リリカ (うなづく)

綾 台所へ行こうとする

敏夫 なあ 綾

綾 なに？

敏夫 いや、何でもない

綾 あなたさつきから変よ

綾 行きかける

敏夫 なあ・・・

綾 だからなに？

敏夫 これからちよつと忙しくなるかも知れない

綾 それは今までも同じでしょ

敏夫 いや、今まで以上に寂しい思いをさせることになる

でも この仕事が終わったら必ず休みをとるから・・・

綾 そうしたら、ゆっくりこれからの事も考えよう

敏夫 やつとその気になってくれたのね

敏夫 だから しばらく我慢してくれ

綾 今までだって我慢してきたわよ

敏夫 それに 私もリリカの入学準備で忙しくなりそうだから構わないわよ

敏夫 そうか

綾 そうよ！ これから忙しくなるわ。

揃えなくちゃならないものが沢山ありそうね、

こんな山奥でどうやって揃えようかしら

ネットで注文したら届けてくれるのかしら

ねえ あなた 宅配サービスあると思う？

指定地域外っていわれちゃったらどうする？

ああ、どうしよう・・・

なんだか胸がどきどきしてきたわ

まずは ランドセルね、

リリカには何色が似合うかしら

リリカ ランドセル選びましょうね

綾リリカの肩に手をかける

その時 綾の表情が一変する

急に無表情になり 硬直する

綾 動かなくなる

敏夫 それに気づいて綾のそばへいく
綾の肩を抱いて

敏夫 ランドセルは買わなくていい

きれいなままで

綾 顔をあげる

綾 (叫ぶ) リリカ!

敏夫 思い出したね

綾 ランドセルを取りに行く日だったのよ

敏夫 ああ

綾 トウモロコシが燃えてる・・・

敏夫 そうだ 悪いのはトウモロコシと人間だ

綾 リリカが家の中に!

敏夫 風向きが悪かった

綾 火! 火が!

敏夫 バカコーンに火をつけるなんて大バカ野郎だ

綾 リリカが いるんです!

誰か助けて 中へ入れて

飛び出そうとする綾

敏夫 それを抑えて

敏夫 なあ綾 もういいんだ

綾 リリカ風邪をひいてて

敏夫 寒い日だった

綾 リリカに留守番をさせてしまった

敏夫 仕方がなかったんだ

綾 すぐに帰ってくるからねって言ったら リリカにつこり笑って

敏夫 うん

綾 ママ 行ってらっしゃいって

綾 ああゝ

綾 泣き崩れる

間

敏夫 君は悪くない

あの日から、俺はバカコーンに火をつけた無謀な奴らと、バカコーンを作り出した
モンスター社に復讐を誓った。

バカコーンが消えたら、荒廃した土地だけが残って、今度は深刻な食料難がやって
来る。

奴ら、次は飢餓に苦しむがいい。

綾 何言ってるの・・・

敏夫 この実験地域は十分役目を果たしてくれた。

綾 ジッケンチイキ？

敏夫 ああ、ここはモンスター社には知られていない秘密の場所だ。

綾 秘密の・・・

敏夫 君のためにもね。

綾 私のため？

敏夫 研究をしながら、記憶をなくした君と暮らしていくには最適だった。

綾 だからここへ来たの？

敏夫 そうさ、ここならいやなことに目をつぶって暮らすことが出来たし、思うように
仕事をする事が出来た。

綾 ここで・・・

敏夫 でも人型ロボットはいつまでも7歳のままだ。このままリリカの代わりをさせ続け
るわけにもいかない。

綾 この子は・・・

敏夫 リリカを引き寄せて

敏夫 いい子だ

リリカ (にっこりする)

敏夫 綾とリリカを両脇に抱える

敏夫 これからも親子三人で静かに暮らすにはここが似合っている

綾 あなた・・・

敏夫 十年目にやっと出来た一人娘なんだ

大バカものたちに取り上げられてたまるか！

綾 あなた？

敏夫 なあ 綾 そう思うだろう

ここに残って三人で幸せに暮らそう

本社からの成功報酬も約束された

これで リリカのクローンの手筈は整った。

敏夫の狂気を表す 衝撃的な照明と音楽

幕